

キルケゴールを論じる者の実存

須藤 孝也

発表者は、キルケゴールの述べたことや行ったことのすべてを、ひとまずその真理性をわきにおいて、思想内在的に有意味なものとして理解することを目指す「キルケゴール学」に携わっている者と自己理解している。過去には、自らの「実存をかけた」テキスト読解をストレートに披露する研究者も少なからずいたが、キルケゴールは公私を明確に区別していたし、キルケゴールが語った「実存」が単に自らが偶然的に自分のものとする事になった形而上学を意味するのではなかったことからすれば、そうしたやり方はキルケゴールを模倣するという点から見ても問題の多いものであったと言わざるをえない。発表者は、いささか安易に聞こえるとしても、ひとまず公私の領域を区別し、研究者としては、自らの私的な「実存」をできる限り

2018年5月16日発行

反映させずにキルケゴール学を進めようと努めてきた。もちろん、公私の二分は、キルケゴールにとって前提でこそあれ、そこで立ち止まるべき終極線ではない。キルケゴールは、公私の二分法を前提としながらも、それを自分なりの仕方で、つまり信仰者として語ることで超えていった。だが、キルケゴール学者として語ることは、キルケゴールと同様に信仰者として語ることを必ずしも意味しない。一学問が各々の研究者に、その思想信条にかかわらず、自由に研究対象を選び、研究することを許すものであるからこそ、信仰者ではない者もキリスト教研究、キルケゴール研究に従事できるのだとも言える。というのもキルケゴールによる公私の超克の仕方が独特のものである前に、キルケゴールが目にしていた公が特殊なものであったのであり、容易に普遍化するものではないからである。様々な公と様々な私があるのである以上、公私の二分法の超克を目指すのだとしても、超克の仕方はその都度考え直されるべきものであろう。その際に現代の人間たちがキルケゴールの実存論を受容し、役立てることは可能だとしても、それはそうした状況の差異を考慮しながらなされるべきである。キルケゴールの実存論にはどこか修正すべき点があるのではないかと常に慎重であることが条件だと考える。